

桜児通信

「獅子の少年」夏目漱石

異様な熱の塊(かたまり)、風に吹かれて

日本文学史に燦然(さんぜん)とした光を放つ「大巨人」夏目漱石。彼の出発点は里子に生まれたり養子に出されたりという「不用の人」でした。彼の生涯の目標は「有用の人(役に立つ人間)」になることだったといえます。生家は経済合理主義による個人主義的な考えの家で漱石は就職してから父に出してもらった学費を分割で返済しています。漱石の両親は子供たちの教育には無関心で勉強したくなければそれもよし、勉強しなければ学校に出してやるが、その費用は後で返済させるというものでした。

漱石はバトス(熱情)型の人でした。幼児から彼は癪が強く夜泣きをし、エネルギーで攻撃的だったという。来客の前で養母の嘘を暴き、無学な教師の過ちを指摘し、水泳・ボート・乗馬・テニスなどスポーツなら何でもしました。この激しいバトスが絶対善(真理)の追求に向かい、小説「道草」の主人公健三の「異様の熱塊」と表現されるものを持つに至ります。帰るべき家がないという事実が、彼に独力で生きる自由を与えたのでした。しかしそこにあつた全てが喜ぶべきものだったとは言えません。だから「有用の人」に彼はこだわったのかもしれない。独力で生きるとは、我流で(自身の力だけで)生きることにほかならず、我流を徹底的に押し通した果てに漱石の世界が拓けてくるのです。彼は孤高(高みに立つた一人)の人でした。彼は生涯、「異様の熱塊」をエネルギーにそれを表現する場を求めて彷徨(ほうこう)を重ねます。大学を出て東京高等師範学校の教師になり、都落ちして四国の松山に赴き、教行の文法的解釈に一時時間を費やすというような授業をします。また熊本の高等学校では逆に、文法にこだわらず、一時間に何ページも突っ走る授業をしました。教師として次々に職場を変え、授業法も変更しました。イギリス留学から帰

2013 no.27(霜月号)
題字♥marina
イラスト♥えもとふゆ
sakurako tsu-shinn

国した漱石は彷徨(さすらう)さまよう)を繰り返し、朝日新聞の作家になってようやく落ち着きます。日本初の「職業小説家」の誕生でした。「猫」・「坊ちゃん」が成功したのは、我流で書いたからでした。彼の我流は生活スタイルから俳句や山水画にも及びました。漱石独自の文体と題材をつかむのは「三四郎」からで、以後彼はこの路線を深めて行くこととなります。鴎外の文体には、

それと交差するように最新の思潮がバランスよく配置されています。新しいものを古典の骨格が背後から支えている気品のある文体で堅固な文体。比べて漱石の作品には当て字が多く、仮名遣いもいろいろ加減。しかも自分流の造語を織り交ぜるといふ具合で、彼は文章そのものにもほとんど注意を払っていません。解説できたのは弟子の内田百閒だけともいわれ、出版社は百閒に原稿の書き直しをしてもらったといえます。肉も骨もすりつぶして練り上げた蒲鉾のような文章、それが漱石の文章でした。そこには平易で意味のよく通る市民派の文章があり、万事、自己流で突き進んで、たどり着いたところのコモンスセンス(良識)が宿る市民的立場があつたという。それはそのまま漱石の一生だったのではないかと思えます。



☆キキミハ「love you」ヲナントヤクスダロウカ

大宰治は「俺のことを殴ってくれ」、二葉亭四迷は「死んでもいい」と訳したと言います。まことに、「らしい」ものです。そしてシェイクスピア研究にロンドンで学んだ一流の英語教師漱石は、というど・彼は「月がキレイです」と訳しておきなさいと学生に言ったそうです。明治の男のはにかみか、彼一流の「お茶目」か。こんな一面を持つ漱

石は弟子たちからこう語られています。

「私の心はつよい圧力をうけて異常にふるえた。「そうだ、いましも私の眼の前にはいるのは、芸術家とか学者とかいうような個々のものを超越した一個の偉大なる人なのだ。ほんとうのいのちをつかんでいる人なのだ。ほんとうの心の世界にすんでいる人なのだ。」私の心は私にこうささやくのであった」漱石は精神世界の獅子のようだったといえます。芥川龍之介も漱石のことを「どこか獅子を思わせる」と言っています。漱石は若い弟子たちがその影響下に入ると、自分たちの精神的自由を失いかねないような、そんな危険なばかりの魅力を放射し、それでいながらどんなに忙しい時にも手紙の返事は必ず書くという面倒見の良さを発揮しました。

鴎外が名実ともにエリート立場から社会を鳥瞰(ふかん)したのに対し、漱石は一市民として下位から日本を訪れた「外発的な」文明を批判しました。「内発的な」思想や文化が日本に生まれてくること、日本人に似合う日本人のための文化を待望していた漱石は、新しい世代がそれを身につけつつあるように思いました。しかし漱石は、孫世代の若者たちを眺め、自らのありようを振り返り、次第に市民社会の限界を痛感するようにもなります。そして東洋の悟道への関心を深め始めていったのです。それが「則天去私」という漱石晩年の言葉になつていったようです。その正体を書くべく「明暗」を執筆する途中、慶応三年生まれの漱石は大正五年、四十九歳で逝つた。

うみなし 編集後記 雲舎寒九

聖華祭もとうに過ぎ去り、氣付いてみれば時雨空。雪の到来を待つ頃となりました。そろそろ今年はどうな年だったかと気にし始める頃です。ついこの間まで、夏日だ、猛暑日だ、観測史上最も遅いとかが新聞紙上を飾って「異常気象」はもはや異常でなくなりつつあります。日本の美しい「四季」はどこに行つたでしょうか。もうすぐ「雨季」・「乾季」とか「暑季」・「寒季」といったツー・シーズンになってしまふのではないのでしょうか。日本人は微妙な変化に敏感に反応すると言われています。文学の世界でも「移り変わりいく」ものに儂(おぼろ)みただけでなく、真も美も、喜も、尊も感じてきました。そんな私たちの価値観は正に世界に誇れるものです。それらは「四季の美しさ」に守られてきたものでした。地球温暖化は私たちの文化にまでその影響を及ぼさうとしているかもしれません。漱石が生きていればなんと違うでしょうか。ひよつとすると、

Think Globally Act Locally! 言いかめ...

人にして信なくんば、その可なることを知らざるなり

為政第二 二十二

いくら何かが優秀な人であっても、

人から信用されたり信じたりできる人物でなければ価値がない、
そんな人間には何もできない。



信とは「人」と「言」から、誠は「言」と「成」からできた漢字です。ここに感じるものはないでしょう。自ら発する「言」を大切に、相手の「言」を重く受け止める。軽はずみな「言」が傷つけるのは相手ばかりでなく、自分自身もおとしめているかもしれない。何かをなすためには「信用・信頼」が重要です。人は一人では何もできず、できたとしてもそれはちっほけなものです。

歴史をひっくり返すようなスゴイことでなくても、ぼくらはいつでも、誰かのために何かがしたいと思います。誰かの役に立つために学びたいと思っています。だから・・・そんなぼくらに必要なものは「信」です。信じられる人、信じる人になりたい。